

# 后妃のゆくえ

——北齊・北周の後宮——

松 下 憲 一

はじめに

清の趙翼は『廿二史劄記』卷一五「北齊宮闈之醜」において、北齊の後宮の乱れは古今のなかで尤も醜惡であると指摘する。<sup>(1)</sup>その一方で、同時期に華北を二分した北周の後宮について醜聞は聞かれなからし、その理由を宇文泰が開国のときいち早く『周礼』を尊重したからだとする。北齊の醜聞というのは、人の妻を奪って己の妻とすることを指すが、この行為は「貞女は二夫を更えず」という儒教の教えからみれば乱れたものである。しかしこれは遊牧民におけるレビレート（嫂婚制）と関連があると思われる。

この点に関して、宮崎市定は『隋の煬帝』のなかで、「もつともこの王朝（北齊）は中国人の名家である渤海の高氏という家柄を名乗るものの、その実はモンゴル系の鮮卑族の出であったので、他民族を征服すればその婦女をわがものにし、父が死ねばその後妻や妾をすべて相続する

というモンゴル族の風習を實行したのであって、礼儀のやかましい中国人の目から見ると、まさに浅ましい禽獸のような行為に思えたのである<sup>(2)</sup>」と述べ、北齊の後宮においてレビレートの風習があったことを示唆している。くわえて北周の宣帝が「父帝の後宮、宮人をすべてわがものにしたことは、大いに漢人官僚の眉をひそめさせた<sup>(3)</sup>」と北周宣帝もレビレートを行ったことにも触れている。ただ宮崎はレビレートの風習があったことを指摘するに止まり、その具体的な内容について詳しい検討はしていない。また近年の研究においてもレビレートのことに触れたものは見当たらない。<sup>(4)</sup>

そこで本稿では、北齊の後宮におけるレビレートの実態について検討を加えると同時に、北周の後宮と比較検討し、北齊・北周の後宮の共通点・相違点について明らかにしていきたいと思う。

## 第一章 「北齊宮闈の醜」

本章では、趙翼『廿二史劄記』卷一五「北齊宮闈之醜」について、その内容を確認する。なお長文におよぶため内容を幾つかに分け、補足説明を加える。

古来、宮闈の乱れ、未だ北齊の如き者有らず。神武、草窺を以て事を起し、本より倫理有るを知らず。魏の莊帝の後、爾朱氏、榮の女なり。建明帝の後、小爾朱氏、兆の女なり。以て魏の広平王の妃鄭氏、名は大車、任城王の妃馮氏、城陽王の妃李氏に及ぶまで、皆、魏の宗室の妃、魏亡びて後、神武、一一之を納る。是れ開国の初め、己に情を肆にし檢を蕩す。

ここでは神武帝（高歡）が北魏の孝荘帝の皇后爾朱氏（爾朱榮の娘）、建明帝の皇后爾朱氏（爾朱兆の娘）、北魏の広平王の妃鄭氏（大車）、任城王の妃馮氏、城陽王の妃李氏を後宮に納めたことを挙げ、高歡のときすでに情のまま節操がなかったとする。しかし前の王朝が滅んだのちに、その王朝の後妃を納めることは何も高歡が特別なのではなく、広く行われており、実際、北斉滅亡後には北周がその後妃を納めている。

長子文襄（高澄）、其の淫風を踵ぐ。薛真の妻元氏が色あるを以て、迎え入れ、之に通ぜんを欲す。元氏、詞を正しくして哭して拒む。文襄、崔奇舒をして送りて廷尉に付し之を罪せしむ。陸操曰く、廷尉は法を守る。須く罪状を知るべしと。文襄怒り、刀環を以て操を築く。また高慎の妻美なり。文襄、之に挑めども従わず。衣尽く破裂す。奔り以て慎に告げ、慎、遂に西魏に降る。慎の妻、従うに及ばず、逆口の中に入る。文襄、盛服して之を見、乃ち従う。また孫騰の妓元玉儀を納れ、琅邪公主に封ず。玉儀の姉静儀、黄門郎崔括の妻なり。文襄、之を奪い、また公主に封じ、括、是に由りて擢せらる。文襄、また神武の妃鄭氏（即ち大車）と私通し、婢の告する所となり、司馬子如が掩覆するに頼りて事寝む。文襄、また神武の妻蠕蠕公主に悉し、一女を生む。此れ文襄の為す所なり。ついで文襄帝（高澄）の事例にうつり、ここでは臣下の妻を文襄が無理矢理に妻としようとした事例が挙げられる。また神武帝の妃鄭氏とは神武が存命中に關係を持った一方、蠕蠕公主とは神武の死後に關係を持ち、一女をもうけている。

文宣（高洋）位を篡うて後、文襄の後元氏、静徳宮に居る。文宣曰く、兄、むかし我が婦を姦せり。我いま須く報ゆべしと。乃ち后に

淫す。崔修の妻王氏、文宣、之に幸し、納れて嬪と為す。娼女薛氏、もと清河王岳の好む所と為る。尋いで宮に入れて嬪と為す。また其の姉を納る。のち帝、其の曾て岳と通ずるを知り、姉妹俱に殺さる。永安王浚、上党王渙、帝の親弟なり。蒼頭劉郁捷をして浚を殺さしめ、即ち浚の妃を以て之に妻わせ、馮文洛をして渙を殺さしめ、即ち渙の妃を以て之を妻はす。凡そ高氏の婦女、親疎と無く、皆、左右をして之に乱交せしむ。帝、自ら呈露し、以て群下に示す。此れ文宣の為す所なり。

文宣帝（高洋）は兄の文襄の元皇后を淫し、家臣の崔修の妻を後宮に納め、清河王岳の寵愛した娼女姉妹を後宮に納めた。しかしかつて岳と關係があつたことを知り、姉妹は殺された。さらに弟である永安王浚の妃李氏を帝家の奴である劉郁捷に、また上党王渙の妃李氏を同じく帝家の奴である馮文洛にそれぞれ妻合わせている。

武成帝（高湛）踐祚、文宣の後李氏、容徳有るを以て、逼りて与に淫乱し、曰く、若し我を許さずんば、当に爾の兒紹徳を殺すべしと。后懼れて之に従う。後、娠める有り。紹徳、闇に至る。見ゆるを得ず。紹徳傭りて曰く、姉姉腹大なり。故に我を見ずと（齊の宮中、母を呼びて姉姉と為す）。后慚じ、是に由りて女を生めども挙げず。武成怒りて曰く、爾、我が女を殺せり。我何為れぞ爾の兒を殺さざらんと。遂に后に対し紹徳を築殺し、并せて后を裸にして之を撻ち、妙勝寺に送りて尼と為す。武成、また魏の静帝の嬪李氏、文宣の嬪王氏及び文宣の幸する所の彭楽の女、任祥の女を納れ、皆、夫人と為す。此れ武成の為す所なり。

武成帝（高湛）は文宣帝の李皇后を脅して關係を持ち、李氏は女兒を姦

娠したが、取り上げなかった。それに激怒した武成帝が李氏のむすこ紹徳を殺し、李氏に対しても鞭打つて妙勝寺に送りて尼とした。また東魏の孝静帝の嬪李氏、文宣帝の嬪王氏、文宣帝が納めた彭楽の娘と任祥の娘を後宮に入れて夫人とした。

一門の中、父子兄弟、俱に色に荒むこと此の如し。何を以て法を垂れん。宜なるかな宮闈相いい習いて風を成すこと。神武在りし時、鄭妃已に文襄に通じ、歿後に及んで蠕蠕公主、また文襄の烝する所と為り、而して文襄の後、また文宣の汚す所と為り、文宣の後、また武成の汚す所と為るが如し。甚だしきは、武成の後胡氏、武成の時に当たりて、已に閹人と褻狎し、また和士開と与に握槊し、遂に士開に通じるに至る。武成崩じて後、后数々仏寺に至り、沙門曇猷と通ず。僧徒、曇猷に戯れて太上と為すに至る。後主、太后謹まらずと聞き、而も未だ之を信ぜず。太后に二尼有りて侍するを見、之を召せば則ち男子なり。是に於いて尼及び曇猷俱に法を正す。斉滅びて後、胡后、周に入り、恣に奸穢を行う。

これまでの事例を総括し、神武帝の後妃と文襄帝が通じ、文襄帝の後妃が文宣帝に汚され、文宣帝の後妃が武成帝に汚される。このように北齊皇室の父子兄弟がみな色に荒むことが習慣となっていたと趙翼は指摘する。そしてさらなる事例として、武成帝の胡皇后が宦官・恩倖和士開・僧侶曇猷と次々と私通を重ねたことを加える。

孝昭帝（高演）位に在りし時、なお穢行無し。其の後王氏、齊亡びて後、また周の宮中に入る。隋の文帝、相と作り、始めて放ちて山東に還す。後主緯、宗族の中に於いて、なお帷薄の醜無し。史、其の稍や武成に優るを謂う。然れども国亡びて後、其の後斛律氏、先

后妃のゆくえ（松下）

に廢されて尼と為る者、改めて元仁に嫁して妻と為る。繼后胡氏もまた改め嫁す。寵する所の宮妃馮小憐、曾て立ちて后と為る。後主、周の武帝に向かい之を乞う。武帝仍りて以て後主に賜う。後主、害に遇うや、小憐を以て代王達に賜う。達の妃を譖し幾ど死せんとす。隋の文帝、以て達の妃の兄李詢に賜い、布裙を著けて配春せしむ。詢の母逼りて自殺せしむ。此れ妃后の辱なり。

孝昭帝、後主のときは比較的まともであったが、北齊滅亡後に後主の斛律皇后と胡皇后が他家に再嫁したことを挙げる。また後主が寵愛した馮小憐は後主亡き後、代王達に下賜されたが、問題を起こしたため李詢に下賜され、最後は李詢の母に逼られ自殺させられた。これは后妃の恥辱的な事例であるとする。

また後主庶兄南陽王綽の妃鄭氏、周の宮に入り、武帝の幸する所と為る。後主の母弟儼の妃李氏、曾て楚帝后に進封せらる。是に至りてまた改めて嫁す。他、浚・渙の妃の如きは蒼頭の辱むる所と為る。神武、また子華山王凝有り、最も孱弱なり。其の妃王氏、また蒼頭と姦す。凝知れども禁する能わず。後事発われ、王氏、死を賜わ。見る可し、北齊の中書令の醜、本より習いて故常と為し、恬として怪しむを知らざることを。而して天道の報施、所謂人の妻女を淫すれば、妻女、人に淫する者、また昭然として見る可きなり。

その他、北齊の諸王の妃について再嫁した事例、家奴と姦通した事例をあげ、北齊では後宮の乱れが恒常的なものとなっていたとし、他人の妻女を淫するもの、妻女の他人と関係を持つものがいたのは天道の報いであるという。

後周の諸帝后を觀るに、隋の革命の後に当たりて、俱に節を失う者

無し。孝閔帝の後元氏、出でて里第に居り、武帝の後阿史那氏、開皇中に至りて殂し、また后李氏、出家して尼と為り、名を常悲と改む。宣帝の楊后、隋の文帝の女なり。帝、其の志を奪わんと欲すも許さず。また四后有り。朱氏、陳氏、元氏、尉遲氏、皆、出家して尼と為り、朱は法浄と名づけ、陳は華光と名づけ、尉遲氏は華首と名づけ、皆、節を完くして死を待ち、絶えて醜声無し。良に、宇文泰が開国の時、早く能く周礼を尊用し、家庭の内、検閑を越えざるに由る。故に国を亡ぼすと雖も、而も遺玷無し。然れば則ち人物を整飭するの主は、身を軌物に納れざる可けんや。

北周の後妃について、滅亡後に貞節を失つたものはいないと指摘する。その事例として、孝閔帝の元皇后は後宮を出でて里第に居り、武帝の阿史那皇后は隋の開皇中に死去し、李皇后は出家して尼となり常悲と名乗った。宣帝の四後の朱氏、陳氏、元氏、尉遲氏はみな出家して尼となった。これは宇文泰がはやくに『周礼』を尊用して後宮内で法を越えるような行いをさせず、そのため国が滅んでも汚名を残さなかつたのだと趙翼は述べる。

趙翼によれば、北斉の後宮の乱れは高歓のときからはじまり、以後、疑われることなく連綿と続けられてきた。対して、北周は宇文泰がはやくに『周礼』を取り入れ、法を正しくしたことで後宮の醜聞は聞かれず、国が滅んでも后妃たちは出家して尼となつて貞節を守つたと指摘する。北斉と北周の後妃の処し方の違いはどこにあるのか。『周礼』の採用と関係しているのであろうか。以下、各章においてそれぞれの后妃のゆくえについて具体的に検討していくことにする。

## 第二章 北斉の後宮

本章では北斉の後宮について、后妃がどのような末路をたどるのかを中心に検討していくことにする。なお北斉の後宮については王怡辰の研究<sup>(5)</sup>があるので、それを参考にしながら具体的に見ていく。

北斉の後宮制度の変遷については、以下の四段階に分けられる。<sup>(6)</sup> (一) 神武帝(高歓)と文襄帝(高澄)の後宮は二人が王であったことから、当然皇帝制度における後宮とは異なり、妻妾の呼称は妃である。また高歓が娶つた蠕蠕公主と高澄が尚した東魏の公主は公主と呼ばれ、その他の妻妾についてはすべて娘と呼ばれた。(二) 文宣帝(高洋)が皇帝に即位すると後宮には夫人・嬪・御が置かれたが定員は設けられなかった。孝昭帝(高演)の統治は僅か一年で後宮制度の変遷については不明である。(三) 武成帝(高湛)は「河清新令」を發布し、後宮制度を『周礼』に準拠して整備した。その結果、皇后(比皇帝)・左右昭儀(比左右丞相)・三夫人(比三公)・九嬪(九卿)・二十七世婦(比従三品)・八十一御女(比正四品)となった。なお左右昭儀を三夫人の上に置くのは北魏の孝文帝の後宮制度を継承するものである。<sup>(7)</sup> またこの他に才人・采女という散号が置かれた。(四) 後主(高緯)の後宮では二人の皇后が同時に立てられ、昭儀以下の定員を倍に増やした。さらに昭儀の上に左右娥英(比左右丞相)を置き、左右昭儀(比二大夫)をその下に据えた。ついで淑妃一人(比相國)を設置するなど後宮の拡大が図られた。なお左右娥英は舜の妃の娥皇と女英に由来する。

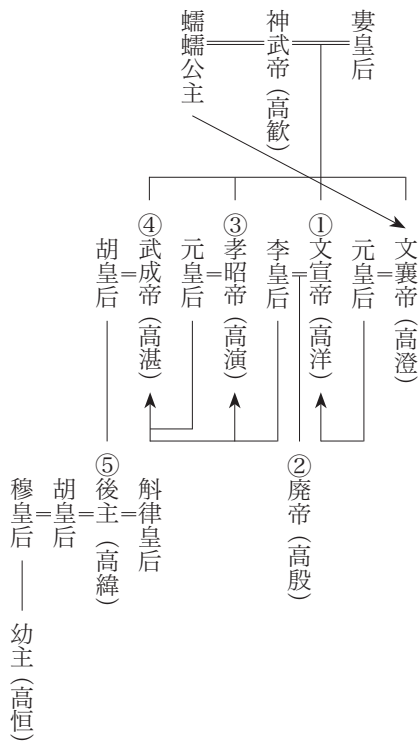
以上、北斉の後宮制度の変遷について概観したが、武成帝の河清新令

によって『周礼』の内容に合うように整備されたことがわかる。その一方で、北魏孝文帝の路線を継承している点も注意すべきである。

## (二) 神武帝(高歡)

神武帝(高歡)は四九六年(北魏太和二十年)に雲中白道の南(現在のフフホト付近)で生まれた<sup>8)</sup>。生まれてすぐに母親韓氏が亡くなったため、姉婿で鎮獄隊の尉景の家に養われた。家は貧しかったが、北族豪族の婁氏を妻を迎えたことで資産を得て、馬を鎮に提供したことで鎮の隊長となった(一八歳)。その後、隊長から函使となり、五一九年(北魏神龜二年)、洛陽を訪れた際に羽林の変を目撃し(二四歳)、懷朔鎮に戻ってから資産を投じて仲間を集めた。五二五年(北魏孝昌元年)、柔

## 北齊系図



后妃のゆくえ(松下)

玄鎮の杜洛周が上谷で反乱を起こすとこれに身を投じ(三〇歳)、のち爾朱栄のもとに帰した。五三二年(北魏太昌元年)、高歡は爾朱氏を滅ぼして孝武帝を立てたが、五三四年(東魏天平元年)、孝武帝が関中に奔ると孝静帝を立てて鄴に遷都した(三九歳)。東魏の実質的な支配者となった高歡は西魏の宇文泰と抗争を繰り返し、五四七年(東魏武定五年)一月、晋陽で死去した(五二歳)。

神武帝の後宮について、『北史』に記録されているのは①武明皇后婁氏、②蠕蠕公主、③彭城太妃爾朱氏、④小爾朱氏、⑤上党太妃韓氏、⑥馮翊太妃鄭氏、⑦高陽太妃游氏、⑧馮娘、⑨李娘、⑩王娘、⑪穆娘の十一人である<sup>9)</sup>。

①婁氏は神武帝が懷朔鎮に住んでいたときに結婚した北族豪族の婁内干の娘で、北族豪族の多くが婚姻を申し込むが嫁に行くことを拒んだ。ある日、婁氏は鎮城で賦役についていた高歡を目撃し、「これがまさに我が夫である」と見惚れ、婢を通じて思いを告げ、同時に私財を貢いで娶ってもらえるように仕向け、父母もやむを得ず婚姻を認めた。五三二年三月、高歡が渤海王に封じられると渤海王妃となった。五四七年一月、高歡が死んで文襄帝(高澄)が継ぐと太妃となり、五五〇年五月、文宣帝(高洋)が即位すると、皇太后となり宣訓宮に移った。五五九年十月、廢帝(高殷)が即位すると太皇太后となるが、五六〇年八月、帝を廢位して孝昭帝(高演)を立て、再び皇太后となった。五六一年十一月、孝昭帝が死ぬと詔書を下して武成帝(高湛)を即位させ、五六二年四月、北宮で崩じた(六二歳)。婁氏は文襄帝、文宣帝、孝昭帝、武成帝を生み、武成帝の時まで後宮において絶大な力を持ち、後継者選びに影響力を有した。



② 蠕蠕公主は柔然可汗阿那瓌の娘で、西魏と柔然が同盟して東魏を攻めることを危惧した神武帝が息子のために嫁をもらおうと使者を派遣したが、阿那瓌は神武帝が嫁に迎えるなら許可すると言ったため、みづからの後宮に迎えた。神武帝との間に子供はできなかった。神武帝が崩じると、「文襄、蠕蠕の国法に従い、公主に蒸し、一女を産む」とあり、柔然の国法に従って文襄帝が父の妃である蠕蠕公主と関係を持ち一女をもうけている。「蒸(蒸)」とは母輩と私通することを意味する。これは明らかにレビレートにあたり、柔然との同盟を維持する目的で行われたと考えられる。

③ 大爾朱氏は爾朱榮の娘で、もとは北魏孝荘帝の皇后で、それを神武帝が納めた。神武帝の大爾朱氏に対する敬愛は婁氏を越えるものがあり、会うときは必ず正装し、彼女の前ではみづからを下官(下僕)と称するほどであった。また蠕蠕公主とともに弓の腕前は一流であったという。のち尼となり、神武帝は彼女のために仏寺を建てている。文宣帝が即位すると太妃となり、酒に酔った文宣帝に犯されそうになって拒んだために殺された。『北史』では文宣帝が「酒に狂うに及んで、まさに太妃に無礼せんとした」とあるが、これもレビレートを行おうとしたものと考えられる。

④ 小爾朱氏は爾朱兆の娘で、もとは北魏建明帝(元暉)の皇后であったが、神武帝が納めて、任城王(湝)を生んでいる。しかしまもなく趙郡公琛(神武帝の弟)と私通したため靈州に流され、その後、范陽の盧景璋に再嫁している。

⑤ 韓氏は懷朔鎮下の太安狄那出身の韓軌の妹で、神武帝が婚姻を求めたが母親に断られ、のち神武帝が出世し、韓氏の夫が死亡していたため

納めた。⑥ 鄭氏は北魏・東魏に仕えた鄭敵祖の娘で、名前を大車(火車)という。もとは北魏広平王の妃であったが、東魏成立後、神武帝が納めた。神武帝が山胡の劉蠡升を討伐中に文襄帝が鄭氏と私通し、帰還後、婢からこのことを告げられた神武帝は文襄帝を杖一百に処して幽閉し、母親の婁氏とも隔絶させた。ときに大爾朱氏が彭城王(浹)を生んだため文襄帝を皇太子から下ろそうと考えた。そこで文襄帝は司馬子如に助けを求め、司馬子如の助言を聞き入れた神武帝が文襄帝を許して事なきを得た。

⑦ 游氏は神武帝が鄴を征服したときに相州長史であった游京之の娘で、神武帝は後宮に納めようとするが、父親の游京之が許さなかったため無理やり納めた。⑧ 馮氏ははじめ北魏任城王の妃となり、ついで爾朱世隆に嫁ぎ、のち神武帝が納めた。また⑨ 李氏も北魏城陽王の妃で、のち神武帝が納めた。馮氏は北燕馮氏の出身、李氏は隴西李氏の出身と考えられる。そのほか⑩ 王氏と⑪ 穆氏がいるが出自は不明である。

神武帝の後宮には、懷朔鎮時期に関係を持った北族の婁氏・韓氏の他、北魏滅亡後に納めたもとは北魏皇帝の皇后の大爾朱氏と小爾朱氏および北魏諸王の妃の鄭氏・馮氏・李氏がいる。ほかに王氏と穆氏がいるが、そのうち王氏については息子の永安王浚が八歳のときに博士盧景裕に質問をしたことが『北齊書』卷一〇、本伝にあり、盧景裕が国子博士になったのは北魏前廢帝の初め(五三一年)のことである。従って、母親の王氏が神武帝に納められたのは北魏孝明帝の時期でまさに六鎮の乱が起こったときあたり、懷朔鎮出身と思われる。穆氏も名前から判断して北魏八姓のひとつで北族貴族の家柄であると思われるが、いつどのような経緯で納められたかはわからない。

## (二) 文襄帝 (高澄)

文襄帝 (高澄) は五二一年 (北魏正光二年) に高歡の長男として生まれ、五三一年 (北魏中興元年) に高歡が渤海王になるとその世継ぎに立てられた。翌年、一二歳のとき孝静帝の妹馮翊長公主を娶っている。五四七年一月に高歡が死去するとあとを継ぎ (二七歳)、五四九年 (東魏武定七年) 四月には相国・齊王に封じられた。しかし禅譲を目前にした八月、鄴にて膳奴の蘭京に弑殺された (二九歳)。

文襄帝には①敬皇后元氏、②宋氏、③陳氏、④王氏、⑤燕氏、⑥公主 (静儀)、⑦琅邪公主 (玉儀) の七人の后妃がいたことが史料から確認できる。

①元氏は東魏孝静帝の妹で、五三二年 (永熙元年)、北魏の孝武帝が文襄帝に娶せた。五五〇年 (天保元年)、文宣帝が受禅して北斉を建国すると文襄皇后となり、静徳宮に住んだ。五五五年 (天保六年)、文宣帝の酒乱がさらに進行し、元氏を高陽 (河南省平頂山市) の宅にうつし、その府庫において「わが兄、むかし我が婦を姦す。われいま須く報いんとす」と言って元氏を淫した。

②宋氏は北魏宋弁の孫で、もとは北魏潁川王斌の妃であったのを文襄帝が納めた。③陳氏はもと北魏広陽王の妓であったのを文襄帝が納めた。そのほか④王氏と⑤燕氏がいるが史料がなく詳細は不明である。また北魏高陽王斌の庶生の姉妹を納め、彼女らは孝静帝から公主に封じられた。⑥姉は名前を静儀といい、さきに黄門郎崔括に嫁いだが、文襄帝が後宮に納め、それによって崔括父子は出世した。⑦妹は名前を玉儀といい、もと孫騰の妓であったが棄てられ、文襄帝に拾われて琅邪公主となった。

后妃のゆくえ (松下)

## (三) 文宣帝 (高洋)

文宣帝 (高洋) は五二九年 (北魏永安二年) に高歡の二男として生まれた。五四九年八月、文襄帝が膳奴の蘭京に殺されると、すぐに賊徒を誅殺して事態を收拾し、晋陽に赴いて実権を掌握した (二二歳)。五五〇年一月、東魏孝静帝から使持節・丞相・都督中外諸軍事・録尚書事・大行台・齊郡王に封じられ、三月には齊王に進爵し、五月、禅譲を受けて皇帝に即位した (二二歳)。即位後の文宣帝は内政・外征に励む一方で即位に反対した北族勳貴を弾圧し、北魏帝室元氏を誅殺し、アルコール中毒が進むなか、五五九年十月、晋陽の徳陽堂で突如死亡した (三二歳)。

文宣帝には①皇后李氏、②段昭儀、③王嬪、④薛嬪、⑤薛嬪の姉、⑥馮世婦、⑦裴嬪、⑧顔嬪の八人の后妃がいたことが史料から確認できる。

①李氏は趙郡李希宗の娘で、文宣帝が太原公であったときに納められた。文宣帝が即位し、後宮を建てることになった際、高隆之・高德正らは漢の婦人は天下の母にはなれないと進言してきた。対して楊愔は漢魏の故事に従つてもとの妃を改めるべきではないと反論した。高德正らは北族出身の段昭儀を皇后とすることで、勳貴の協力を得ようとしたが、結局、文宣帝は李氏を皇后に立てた。その後、五五九年 (天保十年) には可賀敦皇后と改称したが、この称号は遊牧民における皇后の称号である可賀敦と漢族伝統の皇后を合わせた称号となっている。孝昭帝が即位すると降して昭信宮に居らしめ、昭信皇后と号した。武成帝が即位すると、李氏を犯して女兒を妊娠させたが、李氏はその子を取り上げなかったことから武成帝の怒りを買ひ、李氏の息子紹徳は殺され、李氏は裸に

されたくえ鞭打たれ、瀕死の状態でも水路に投げ込まれ、ようやく蘇生したのち妙勝尼寺に運び込まれた。李氏は仏法を信奉していたので尼となり、北斉滅亡後、関中に入り、隋のとき趙郡に帰ることができた。

②段氏は段韶の妹で、父の段栄は北魏末の六鎮の乱の際、五原郡から平城に避難し、杜洛周に加わったのち、高歓とともに爾朱栄のもとに奔った。段栄の妻は高歓の妻である婁氏の姉にあたる。勲貴は段氏を皇后に立てようとするが、その運動は実現しなかった。しかし段氏の礼遇は皇后と変わらなかった。段氏には子供はなく、後主のとき録尚書の唐邕に再嫁した。

③王氏は琅邪の人で、姉は崔脩に嫁ぎ、崔脩はその関係から出世して尚書郎となった。④薛氏はもと倡家の娘で、一四、五歳のとき、清河王岳に気に入られ、父親が後宮入りを求め、⑤姉とともに後宮入りした。しかしのちに文宣帝が清河王岳との関係や父親のために司徒公を求めたことを知り、姉は鋸殺され、妹は妊娠していたので、出産後に殺された。

このほか⑥馮氏、⑦婁氏、⑧顔氏がいる。顔氏は墓誌があり、それによると齊州の人で、春秋時代の孔子の弟子の一人顔回の父顔路の苗裔であるとするが仮託であろう。五五〇年(天保元年)に西朝(晋陽)の嬪となり、五五三年(天保四年)、隴西王紹廉を託育し、弘徳夫人(河清新令では三公に比される三夫人の地位)に転じたのち、五七六年(武平七年)、四七歳で鄴にて死去している。

#### (四) 孝昭帝(高演)

孝昭帝(高演)は五三五年(東魏天平二年)に高歓の六男として生ま

れ、五三八年(東魏元象元年)に常山郡王に封じられ(四歳)、五五〇年(天保元年)には常山王に進爵した(一六歳)。その後、文宣帝のもと司空・録尚書事・大司馬を歴任し、五五九年、文宣帝が死去して幼主(廢帝)が即位すると太傅・録尚書として朝政を総覧した。翌年二月、諸王・勲貴の支持を得て鄴にてクーデタを起こして楊愔らを殺害し、八月、晋陽宣徳殿にて即位した(二六歳)。孝昭帝は高歓時代の勲貴を尊重する路線を採用するが、落馬の事故に遭い、五六一年、晋陽で死去した(二七歳)。

孝昭帝には①皇后元氏と②桑氏の他に諸姫がいたと史料にはあるが、詳細がわかるのは皇后の元氏だけである。元氏は北魏江陽王継(道武帝の子孫)の子である元蛮の娘で、孝昭帝が常山王であったときに納めて妃となり、五五九年(天保十年)、北魏宗室である元氏の大誅殺が行われた際、孝昭帝が元氏と元蛮のためにしきりに助命を求めて許され、姓を歩六弧氏に改めた。孝昭帝が即位すると皇后となったが、武成帝が即位すると降して順成宮に居らしめた。北斉滅亡後、北周の後宮に入り、楊堅が丞相となると山東に還された。

#### (五) 武成帝(高湛)

武成帝(高湛)は五三七年(東魏天平四年)に高歓の九男として生まれた。五三八年(元象元年)、長広郡公に封じられた。五四四年(武定二年)、高歓は柔然と結ぶため柔然可汗の太子菴羅辰(諡羅臣)の娘叱地連(七歳)を高湛(八歳)の妻に迎えて「隣和公主」と号した。五五〇年(天保元年)、長広王に進爵し、尚書令となり司徒を兼務した。五六〇年(乾明元年)、楊愔は高湛を大司馬・并州刺史としたが、高湛は



高演と組んで楊愔らを誅殺する密謀を計画し、太傅・録尚書事・領京畿大都督となってクーデタを実行した。孝昭帝が即位すると右丞相となり、孝昭帝が晋陽に向く際には鄴に留まり政治を執り行った。五六一年、孝昭帝が死去すると遺詔により即位した(二五歳)。五六五年(河清四年)四月、息子緯に譲位して太上皇帝となって政治をとった(二九歳)。五六八年(天統四年)十二月、鄴の乾寿堂にて死去した(三二歳)。

武成帝には①皇后胡氏、②弘徳夫人李氏、③文宣王嬪、④盧勣叉の妹、⑤馬嬪、⑥彭粲の娘、⑦任祥の娘がいた。

①胡氏は安定の胡延之の娘で、天保のはじめに選ばれて長広王妃となり、武成帝が即位すると皇后となった。このとき胡氏は宦官と私通し、ついで恩倖の和士開とも私通した。さらに武成帝の死後はしばしば仏寺にいき、僧侶の曇猷と私通を重ねた。北齊滅亡後、北周に入り、ほしのままに姦穢を行い、隋の開皇中に死去した。

②李氏は趙郡の李叔讓の娘で、はじめ東魏孝静帝の後宮に入り嬪となったのち、武成帝がみずからの後宮に納めた。③王氏はもと文宣帝の後宮の嬪であったのを武成帝が納めて嬪とした。④盧氏は宦官盧勣叉の妹で、武成帝の嬪となった。武成帝が亡くなると、二人は胡太后の命により自殺させられるところであったが、後主が哀れに思い、秘かに逃がした。⑤馬氏は武成帝の嬪となったが、胡皇后に妬まれ自殺した。⑥彭粲の娘と⑦任祥の娘は父親の事件に連座して後宮に没官され、文宣帝に寵愛された。のち二人は武成帝の後宮に入った。これらのうち、③王氏、⑥彭氏、⑦任氏はいずれも文宣帝の後妃であったものを武成帝が納めており、レビレートに相当する。

#### 后妃のゆくえ(松下)

#### (一六) 後主(高緯)

後主(高緯)は五五六年(天保七年)に武成帝の長男として晋陽で生まれた。五六二年(大寧二年)、武成帝が即位すると皇太子に立てられ、五六五年(河清四年)、武成帝が譲位して皇帝に即位した(九歳)。五六八年(天統四年)十二月、武成帝が死去するとみずから政治を見るようになるが、実際には恩倖の和士開らが取り仕切った。五七一年(武平二年)七月、和士開らの専権に対して不満をもった諸王・勳貴はクーデタを起こして和士開らを殺害した。このとき漢人貴族の祖珽は恩倖と結んで勳貴の弾圧を後主にすすめ、五七二年(武平三年)七月、勳貴の斛律光を誅殺した。五七六年、北周が晋陽を攻め落とすと、後主は鄴に退却し、皇太子恒(八歳)に譲位して太上皇帝となった。五七七年、北周軍が鄴に逼ると、顔之推らは黄河の南で兵を募って立て直す、それもできなければ陳に亡命することを太上皇帝に進言した。そこで太皇太后・太上皇后、ついで幼主が鄴を脱出した。太上皇帝は百騎を従えて逃走し、青州から陳へ亡命しようと図ったがみな北周軍に捕らえられ長安に送られた。

後主には①皇后斛律氏、②皇后胡氏、③皇后穆氏、④馮淑妃、⑤李蛾英、⑥裴蛾英、⑦曹昭儀、⑧董昭儀、⑨毛夫人、⑩彭夫人、⑪王夫人、⑫小王夫人、⑬李夫人(二人)がいた。後主の時期の後宮について『北史』后妃序では「後主既に二后を立て、昭儀以下みな其の数を倍す。また左右蛾英を置き、左右丞相に比し、昭儀を降して二大夫に比す。尋いでまた淑妃一人を置き、相国に比す」とあり、武成帝の河清新令に変更を加え、左右昭儀にかわって左右蛾英を置いたが、これは陽休之が作成したもので、舜の妃の名前が蛾皇・女英であったことにちなむという。

また五七二年（武平三年）八月に斛律氏が皇后を廃されて庶人となり、かわって右昭儀の胡氏が皇后に即位するが、十月に弘徳夫人の穆氏が左皇后となり、二人の皇后が並び立つことになった。しかし十二月には胡氏が皇后を廃されて庶人となり、翌年二月に左皇后穆氏が正皇后となることで二人皇后は消滅する。なお左右の後妃を設置することは北族習俗の名残であると蔡幸娟は指摘する<sup>19</sup>。

①斛律氏は勲貴の代表である斛律光の娘で、はじめ皇太子妃となり、後主が即位すると皇后に立てられた。武平三年正月に娘を生み、後主は斛律光を喜ばせようと男子を生んだと詐称し、大赦までした。同年七月に斛律光が誅殺されると斛律氏は皇后を廃されて別宮に移され、のち令により尼となった。北斉滅亡後は開府元仁に再嫁した。

②胡氏は胡長仁の娘で、武成皇后胡氏（胡太后）の姪にあたりと同時に、後主に嫁いだことから胡太后の義理の娘になった。胡太后は不貞を重ねたことで後主に対する母儀の道を失い、そのことを恥じて後主を喜ばせようと姪を飾って宮中に入れ、後主がみとめて弘徳夫人に立てられた。ついで左昭儀に進み、斛律皇后が廃されると皇后になった。しかし穆氏を皇后に立てたい陸太姫の讒言により胡太后の怒りを買ひ、剃髪のうちえ実家に還された。後主は胡氏を忘れられず、詩にその想いを託して送った。のち斛律氏とともに後宮に呼び戻されたが、数日後に鄴が陥落した。その後、再嫁した。

③穆氏は名を邪利（小字を黄花、後字を舍利）といい、もと斛律皇后の従婢であった。母親は名を輕霄といい、もとは穆子倫の婢で、ついで侍中宋欽道の家に入った。そこで私通して娘を生んだが、或いは宋欽道の娘であるとも言われる。宋欽道が誅殺され、娘は後宮に没官され、後

主に幸あつて後宮では舍利太監と称された。女侍中の陸太姫はその寵愛を知って養女とし、弘徳夫人に推薦した。その後、陸太姫の讒言により胡氏が廃されると穆氏は一人皇后となった。なお穆氏がその後どうなったのか史料には書かれていない。

④馮氏は名を小憐という。もとは穆皇后の従婢であったが、穆皇后の薦めにより後宮に入った。琵琶や歌舞がたくみで、後主はそれに惑い、つねに側においた。北斉が滅び、後主が長安に移されると、北周の武帝は馮氏を求め、後主は「朕は天下を視すること脱履の如し、一老嫗豈に公に与えるに惜しまんや」といつて馮氏を与えた。のち北周の代王達に下賜されたが、代王達が楊堅に殺されると馮氏は李詢に下賜され、最後は李詢の母に自殺させられた。

⑤李氏は衛尉卿李祖欽の娘で、後主の後宮に入り左昭儀となりついで左娥英となった。このとき⑥裴氏は右娥英となった。⑦曹氏は楽人曹僧奴の娘で、姉妹そろつて後主の後宮に入ったが、姉は後主の意に背いたため顔の皮を剥がされ、妹は琵琶が上手だったため昭儀となった。後主は曹氏のために隆基堂を建てたが、陸太姫の誣告により殺された。そのほかにも多数の後妃がいるが、そのうち⑨毛氏は箏の演奏が上手で、和士開の推薦により後宮入りした。彭氏は音妓をもつて寵愛され、晋陽で亡くなったあと仏寺が建てられた。⑩李夫人（二人）のうち、一人は李孝貞の娘であるが、李氏は北斉の帝室と婚姻関係を重ねる名門である<sup>21</sup>。またもう一人の李氏はまったく逆の立場の隸戸の娘で、五弦の演奏が巧みであったことから後宮入りした。恩倖の和士開に代表されるように、この時期、北斉の宮廷では胡琵琶などの楽器の演奏が巧みであるものが皇帝に気に入られて出世することがよく見られた。

以上、北斉の後宮について見てきたが、このなかでレビレートと関連するものを抜粋すると以下のようになる。

- (一) 神武帝の蠕蠕公主を文襄帝が悉した。
- (二) 文襄帝の元皇后を文宣帝が淫した。
- (三) 文宣帝の李皇后を孝昭帝が降して昭信皇后とした。
- (四) 孝昭帝の昭信皇后(文宣帝の李皇后)を武成帝が淫した。
- (五) 孝昭帝の元皇后を武成帝が降して順成宮に居らしめた。
- (六) 文宣帝の後宮の王嬪と彭楽の娘・任祥の娘を武成帝が後宮に納め夫人とした。

レビレートとは、『史記』卷二一〇、匈奴列伝に、「父子兄弟死し、其の妻を取りて之を妻とす」とあり、『三国志』卷三〇、烏丸伝の注に引く王沈『魏書』では「父兄死し、後母を妻とし、嫂を執る」とあるように、父兄が死んでのち、その妃妾を子弟が引き継ぐことをいう。ただし生母を子供が妻に迎えることはない。なお遊牧国家におけるレビレートの目的は、王家の血統を維持することと、部族間の同盟を維持し財産の流出を防ぐことにある<sup>(23)</sup>。

北斉では文襄帝が蠕蠕公主を迎えたことにはじまるが、これは柔然の国法に従ったと史料には記されており、明らかにレビレートに相当し、柔然との同盟維持という効果がある。ではその後のケースはどうであろうか。基本的には皇帝の代替わりごとに行われ、その対象が先帝の皇后であることが注目される。史料には「蒸(悉)」や「淫」といった表現で書かれており、普通のことではない印象を与えるが、これを趙翼のように北斉の後宮の風紀が乱れた結果として片付けるのはあまりに単純であろう。やはりここには明確に先代の皇后を引く継ぐ意志があり、後継

后妃のゆくえ(松下)

者としての正統性を確保するねらいがあると考えられる。

### 第三章 北周の後宮

本章では北斉と比較検討するために北周の後宮について具体的に見ていくことにする。北周の後宮制度の変遷については、以下の四段階に分けて考えることができる。(一)文帝(宇文泰)の後宮には姫、夫人、妃という称号があったことが史料からわかるが、それぞれの定員や階級については不明である。(二)孝閔帝(宇文覺)の後宮は、宇文覺が天王に即位したことから、その妃は王后と称され、その下に三夫人、三妃、御媛、御婉が置かれた。(三)明帝(宇文毓)の後宮は、五五九年(武成元年)八月に天王を改め皇帝と称したことから、王后は皇后に改められた。ついで武帝(宇文邕)の五七三年(建德二年)八月に三夫人を改め三妃を置き、同時に六嬪が設置された。これにより北周の後宮は、皇后(視皇帝)、三妃(視三公)、三妃(視三孤)、六嬪(視六卿)、御媛(視大夫)、御婉(視士)という形に整備された。しかし五七七年(建德六年)十一月に妃を二人、世婦を三人、御妻を三人とし、その他はすべて廃止した。(四)宣帝(宇文贇)の後宮は、逆に拡大の方向に向かい、五人の皇后を立て、夫人以下は定員を設けなかった。

以上のことから、北周の後宮制度は『周礼』をモデルとしつつも、完全なそれを再現するものではなかったことがわかる。また宣帝のときには五人の皇后が立てられるなど、特異な状況も見られる。なお史料には文帝・武帝・宣帝時代に姫という呼称が散見するが、これは後宮の位階ではなく、後宮内の下級の女性(賤妾)の総称と考えられる<sup>(24)</sup>。

(一) 文帝 (宇文泰)

文帝 (宇文泰) は五〇五年 (北魏正始二年) に、宇文肱の四男として武川鎮で生まれた。六鎮の乱が起ると、宇文肱とともに鮮于修礼の軍に随ったのち、葛榮ついで爾朱榮とわたった。なおこの間父の宇文肱と三人の兄を失っている (三男洛生は爾朱榮に殺された)。宇文泰は賀拔岳に従って隴西の万俟醜奴の討伐に向かい、賀拔岳が殺されるとその遺衆を引き継ぎ、関中に拠った。五三四年、孝武帝が洛陽を脱出してくるとこれを迎えたが、まもなく殺害して五三五年 (大統元年)、文帝を擁立した。宇文泰は督中外諸軍事・大行台・安定郡公として実権を握り、五五六年 (恭帝三年) 一月には『周礼』にしたがって六官を建てたが、同年十月、病により雲陽で死去した (五二歳)<sup>25)</sup>。宇文泰は中山公護 (宇文泰の長兄顥の子) に息子覺の補佐を託した。

文帝 (宇文泰) には①文帝元皇后、②文宣叱奴皇后、③姚夫人、④達歩干妃、⑤王姬および諸姫がいた。

①元氏は北魏孝武帝の妹で、はじめ平原公主に封じられて張歆に嫁いだ。しかし張歆の性格が貪欲残忍で、元氏に対して礼節を欠き、元氏の侍婢を殺したため、元氏は兄の孝武帝に訴えた。そこで孝武帝は張歆を捕らえて殺した。元氏は馮翊公主に改封されて宇文泰に嫁ぐ計画であったが、結納前に孝武帝が洛陽を脱出したため、孝武帝が宇文泰のもとに奔った五三四年 (永熙三年) に嫁いだ。その後、孝閔帝 (宇文覺、宇文泰の第三子) を生み、五五一年 (大統十七年) に死去した。

②叱奴氏は代人で、宇文泰が丞相となった五三四年 (永熙三年) に納めて姫とし、武帝 (宇文邕、宇文泰の第四子) を生んだ。五五一年 (大統十七年) に元皇后が死去したため、叱奴氏が皇后となったと思われる

る。五六八年 (天和二年)、武帝のときに皇太后となり、五七四年 (建德三年) 死去した。

③姚氏の来歴について史料には書かれていないが、姚氏は五三四年 (永熙三年) 宇文泰が夏州にいたとき統万城において明帝 (宇文毓、宇文泰の長子) を生んでいるので、少なくともこれ以前に宇文泰に嫁いだものと思われる。姓から判断すると後秦を建てた羌族姚氏の子孫で、夏州に居住したものではないだろうか。姚氏がいつ亡くなったのか不明である。

④達歩干氏は齊煬王憲 (宇文泰の第五子)、⑤王氏は趙僭王招 (宇文泰の第六子) を生んだこと以外はわからない。また他の后妃について『周書』卷一三、文閔明武諸子伝、『北史』卷五八、周室諸王伝には「後宮」と書かれ宇文泰の諸子を生んだことしかわからない。

(二) 孝閔帝 (宇文覺)

孝閔帝 (宇文覺) は五四二年 (西魏大統八年)、宇文泰の三男として同州の官舎で生まれた。母親は元氏である。五五一年、九歳<sup>26)</sup>で略陽郡公となり、五五六年三月、安帝公 (宇文泰) の世子となった。なお三男の覺が世継ぎに立てられたのは、母親が北魏孝武帝の妹であるという出自が関係していると思われる。長男毓の母親は出自不明の姚氏、二男震の母親は名も知れない後宮の女性である。五五六年十月、宇文泰が死去すると太師・大冢宰を継ぎ、十二月には恭帝から周公に封じられ、禪讓を受けて翌年一月、天王に即位した (二四歳)。孝閔帝は宇文護の執政をにくみ朝臣と結託して宇文護の暗殺を計画したが露見して宇文護に幽閉されたのち殺害された (一六歳)。



孝閔帝には①元皇后と②陸夫人の二人の存在が確認できる。

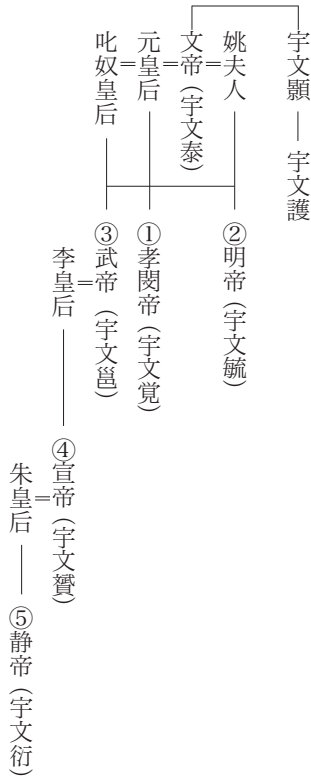
①元氏は名を胡摩といい、西魏文帝の第五女で、はじめ晋安公主に封じられ、五五一年、宇文覺が略陽公に封じられたときに嫁いだ。五五七年、宇文覺が天王に即位すると、王后となったが、宇文護によって孝閔帝が廃位されると、元氏は出家して尼となった。五七二年(建徳元年)、武帝(宇文邕)が宇文護を誅殺すると孝閔皇后として崇義宮に住んだ。北周が滅ぶと、宮中を出て里第に住み、六一六年(大業十二年)に死去した。

②陸氏は紀厲王康を生んだことが『周書』卷一三、文閔明武諸子伝に書かれているのみである。

### (三) 明帝(宇文毓)

明帝(宇文毓)は、五三四年(永熙三年)、宇文泰の長男として夏州統万城で生まれた。そこで統万突と名付けられた。五四八年(大統十四

### 北周系図



年)、寧都郡公に封じられ(二四歳)、五五七年、孝閔帝が即位すると柱国・岐州諸軍事・岐州刺史となり、善政を行い民から慕われた。五五八年、孝閔帝が廃位されると宇文護に迎えられて即位した。五五九年(武成元年)、宇文護が上表して政権を還したことで、明帝が親政することになったが、軍権は依然として宇文護が握っていた。五六〇年、宇文護により毒殺された(二七歳)。

明帝には①独孤皇后、②徐妃およびその他后妃がいた。

①独孤氏は武川鎮出身の独孤信の長女で、明帝が寧都郡公に封じられたときに納められて夫人となった。孝閔帝が廃位されて明帝が天王に即位した五五八年正月、王后に立てられたが、四月に死去した。五五九年(武成元年)八月、天王を改め皇帝と称すと、追尊して皇后となった。

②徐氏は畢刺王賢を生んだこと、またその他後宮の女性が酈王貞、宋王寔を生んだ。

### (四) 武帝(宇文邕)

武帝(宇文邕)は、五四三年(西魏大統九年)に宇文泰の四男として同州で生まれた。五五四年、輔城郡公に封じられ(一一歳)、孝閔帝が即位すると大將軍として同州に出鎮し、明帝の時には、大司空・治御正・領宗師となり朝廷の大事に参与した。五六〇年、明帝の遺詔により即位し(一八歳)、五七二年、宇文護を誅殺して親政を始め、五七七年、北齊を滅ぼしたが、翌年六月、長安にて病死した(三六歳)。

武帝には①阿史那皇后、②李皇后、③庫狄姁、④馮姁、⑤薛世婦、⑥鄭姁がいたことが史料から確認できる。

①阿史那氏は突厥木杆可汗俟斤の娘で、俟斤は北齊と北周の両方から



婚姻の申し出を受けていた。北周の使者が阿史那氏を迎えに来ていたとき、侯斤は北斉との婚姻を考えていた。そのときまたまた雷風が起り、つむじ風がその天幕を壊した。これを天譴と懼れた侯斤は阿史那氏を送り、五六八年（天和三年）三月、武帝が長安に迎えた。ときに阿史那氏一八歳。五七八年（宣政元年）、宣帝が即位すると皇太后となり、五七九年（大象元年）二月、天元皇太后に改められ、さらに五八〇年（大象二年）二月には天元上皇太后となった。静帝が即位すると太皇太后となり、五八二年（隋開皇二年）に三三歳で亡くなった。

②李氏は名を娥姿といい、楚の人である。五五四年（西魏恭帝元年）、江陵が陥落したとき李氏も籍没されて長安に連行され、宇文泰が武帝に下賜した。のちに寵愛されて宣帝を生み、五七八年（宣政元年）、宣帝が即位すると帝太后となったが、五七九年（大象元年）には天元帝太后、ついで天皇太后となり、翌年には天元聖皇太后となった。宣帝が崩じ、静帝が即位すると大帝太后となり、五八八年（隋開皇元年）三月、出家して尼となって常悲と改名し、五八八年（開皇八年）、五三歳で死去した。尼僧の礼でもって大興城の南に葬られた。

③庫狄婁、④馮姫、⑤薛世婦、⑥鄭姫については『周書』卷一三、諸子伝に名前が見えるだけである。

(五) 宣帝 (宇文贇)

宣帝 (宇文贇) は五五九年（武成元年）、武帝の長男として同州で生まれた。五七二年（建徳元年）四月、皇太子に立てられた。五七八年（宣政元年）六月、武帝が死去すると皇帝に即位した（二〇歳）。五七九年（大象元年）二月、皇太子衍（のち闡と改める）に譲位して天元皇帝

を称す。同年七月、天元皇后・天后・天右皇后・天左皇后を置き、翌年二月には天元大皇后・天大皇后・天右大皇后・天左大皇后と改称し、さらに三月には上記の四皇后に天中大皇后を加えて五皇后が置かれた。そして五月、二二歳の若さで死亡した。

宣帝には①楊皇后、②朱皇后、③陳皇后、④元皇后、⑤尉遲皇后、⑥王姫、⑦皇甫姫がいた。

①楊氏は楊堅の長女で、名を麗華といい、宣帝が皇太子のときに武帝が皇太子妃として納めた。宣帝が即位すると皇后に立てられた。五七九年（大象元年）二月、宣帝は息子衍に譲位してみずから天元皇帝と称した。このとき楊氏は天元皇后となった。七月、天后（朱氏）および左皇后（陳氏）と右皇后（元氏）を立て、天元皇后（楊氏）とあわせて四皇后が並び立った。さらに翌年二月には四皇后に大を加えて大皇后とし、三月にはあらたに尉遲氏を天左大皇后とし、もと天左大皇后であった陳氏をあらたに天中大皇后としたことで、五人の皇后が置かれることになった。その後、宣帝は楊氏を譴責し、死を賜い自殺を逼ったが、母親の独孤氏が謝罪し、ようやく許された。宣帝の死後、皇太后になって弘聖宮に住んだ。隋が建国されて五八六年（開皇六年）、楊氏は樂平公主となり、六〇九年（大業五年）、煬帝に従って河西の張掖に行幸し、その地で亡くなった（四九歳）。

②朱氏は呉の人で、名を満月といい、家の事に坐して東宮に没官された。おそらく武帝の李皇后と同じく、江陵陥落の際に長安に連行されたのである。五七二年（建徳元年）年、宣帝が皇太子に立てられると朱氏は選ばれて衣服を披う係となって宣帝に召され翌年、静帝衍を生んだ。五七九年（大象元年）四月、天元帝后に立てられ、七月、天皇

后となり、翌年二月、天大皇后となった。朱氏は良家の出身ではなく、宣帝よりも十歳ほど年上であったので寵愛されなかったが、静帝を生んだことで尊崇され、後宮における順位は楊皇后に次ぐものであった。宣帝が崩じると静帝は朱氏を帝太后とした。五八一年（隋開皇三年）、出家して尼となった法浄と名乗り、五八六年（開皇六年）、四〇歳で死去し、尼僧の礼でもって京城に葬られた。

③陳氏は潁川の人で名を月儀といい、もと北齊に仕えた山提の第八女である。武帝が北齊を平定したとき山提は大將軍・潁陽郡公に拝され、陳氏は五七九年（大象元年）六月に選ばれて後宮に入り、徳妃となった。翌月には天左皇后に立てられ、翌年二月には天左大皇后となった。さらに同年三月に宣帝は五帝にならつて五人の皇后を置くことにし、あらたに天中大皇后を置いて、陳氏をあてた。宣帝が崩じると陳氏は出家して尼となり、華光と改名した。

④元氏は河南洛陽の人で、名を榮尚といい、開府元晟の第二女にあたる。一五歳のとき選ばれて後宮に入り、貴妃となった。五七九年（大象元年）七月、天右皇后に立てられ、翌年二月に天右大皇后となった。宣帝が崩じると出家して尼となり華勝と改名。陳氏と元氏は同時期に入宮してともに妃となり、その後も同じように皇后に進んだ。年令も同じであったため二人は特に親密であった。尼となったあと、李氏・朱氏・尉遲氏が相次いで亡くなったが、二人は唐の太宗の貞観中頃まで存命であった。

⑤尉遲氏は名を熾繁といい、蜀国公尉遲迥の孫娘にあたる。はじめ西陽公宇文温に嫁いだが、入朝した際に宣帝に逼られて関係をもつた。宇文温が誅殺されると後宮に入り、長貴妃に拝された。五八〇年（大象二

后妃のゆくえ（松下）

年）三月、天左大皇后となり、宣帝が崩じると出家して尼となり、華首と改名した。五九五年（隋開皇十五年）、三〇歳で死去した。

そのほか⑥王姫と⑦皇甫姫については名前が伝わるのみである。

#### （六）静帝（宇文衍）

静帝（宇文衍）は、五七三年（建徳二年）六月、宣帝の長男として東宮で生まれた。五七九年（大象元年）一月、皇太子に立てられ、二月に皇帝位を譲られて正陽宮に入った。翌年、宣帝が死去すると天台に移り、天皇上皇太后阿史那氏を太皇太后、天元聖皇太后李氏を太帝太后、天元大皇后楊氏を皇太后、天大皇后朱氏を帝太后と改称し、天中大皇后陳氏、天右大皇后元氏、天左大皇后尉遲氏はみな出家させて尼とした。五八一年（大定元年）二月、随王楊堅に禪讓して介国公となり、五月に殺された（九歳）。

静帝は①司馬皇后のみ記録がある。司馬氏は名を令姫といい、柱国・滎陽公消難の娘である。司馬消難はもと北齊に仕えていたが、文宣帝の時に謀反の疑いをかけられて北周に亡命した。五七九年（大象元年）二月、宣帝が讓位し、七月に静帝のために納めて皇后に立てた。翌年八月、司馬消難が陳に亡命すると、楊堅は皇后を廢位して庶人とした。その後、隋の司隸刺史李丹に嫁ぎ、唐の貞観中まで存命であった。

以上、北周の後宮を見てきたが、このなかで宣帝のとき先代武帝の後妃を納めることが行われた。これはどのように理解すればよいのであるうか。

宣帝の行動に見えるものは執拗なまでの「天」への執着である。みず

からを天元皇帝と称し、居処を天台と称し、制詔を天制詔、敕を天敕と称し、臣下に対して常に天と自称し、さらに車旗章服を前王の数の倍にし、人々が高・大と称するのを禁止した。このような行動のうらにあるのは偉大な父武帝の存在である。武帝を越えるためにあらゆるものを変革し、全ての面で越えようとした。その現れが天であり、また複数の皇后を立て、武帝の宮人を自分の後宮に納める<sup>(27)</sup>といった行動になった。

従って宣帝の行為はレビレートと言えないことはないが、発想においては遊牧的伝統にもとづくものではないように思われる。また宣帝に至るまで北周ではレビレートが行われていないが、これは孝閔帝、明帝、武帝の三代にわたる即位に宇文護が関与していたことと関係があると思われる。すなわちこの三人は宇文護によって擁立されたもので、いわば傀儡であったために独自の行動を許されていなかった。しかし武帝が宇文護を誅殺したことで、ようやく皇帝が主導権を握る体制が確立された。武帝は宇文護を誅殺すると、廃位された兄の覚に皇帝号を上して孝閔帝とし、廢位とともに出家して尼となった皇后の元氏を孝閔皇后として崇義宮に住ませた。さらに宣帝は積極的に主導権を発揮し、みずから上帝に比するまでになった<sup>(28)</sup>。

五八〇年(大象二年)五月、宣帝が崩じると、静帝は天元上皇太后(阿史那氏)を太皇太后、天元聖太后(李氏)を太帝太后、天元大皇后(楊氏)を皇太后、天大皇后(朱氏)を帝太后とし、そのほか天中大皇后(陳氏)・天右大皇后(元氏)・天左大皇后(尉遲氏)を出家させて尼とした。静帝にとって朱氏は生母であり、また楊氏は随国公楊堅の娘であるため出家させることはなかったが、そのほか先帝の后妃については帝の崩御にともなうて強制的に出家させている。これは皇帝の崩御にと

もない后妃が強制的に出家させられた最初の事例にあたる<sup>(29)</sup>。なお朱氏は隋が建国されると出家させられている。北周では后妃を強制的に出家させ、他家に嫁がせなかった。

### おわりに

北斉・北周の後宮について検討してきた結果、北斉では代替わりごとに先帝の皇后を引き継ぐことが意図的に行われていたことが判明した。これは先帝の皇后をみずからの後宮に納めることによって後継者としての正統性を高めようとしたものと思われる。一方、北周では宣帝が先帝である武帝の后妃を自分の後宮に入れた。宣帝は武帝を乗り越えるための手段の一つとしてレビレートを行った。これら北斉・北周のレビレートは遊牧国家におけるレビレートとまったく同じではない。遊牧国家におけるレビレートは王家の血統を維持することと、部族間の同盟を維持し財産の流出を防ぐことにあるが、北斉・北周の場合は、血統の維持や同盟といった目的よりは、君主の正統性を高める目的で行われている。もちろん遊牧国家におけるレビレートにも同様の効果があったことは否定しない。しかし遊牧国家におけるレビレートと完全に同じものではない。

史料ではレビレートは「淫」、「蒸(蒸)」といった否定的な行為として捉えられている。また淫乱な君主による特異な現象として理解されているが、これは史料を残したものの理解であって、その評価から一步引いた立場で捉え直す必要がある。隋の煬帝も父の后妃である宣華夫人陳氏と宣華夫人蔡氏を父が崩御したのちに蒸している<sup>(30)</sup>。これも煬帝が淫

乱な皇帝であると理解するのではなく、後継者争いを制して皇帝となった煬帝がみずからの正統性を高めるために行ったものと理解すべきであろう。

#### 注

- (1) 岡崎文夫『魏晋南北朝通史』（弘文堂書房、一九三二年、四〇八頁）には、「而も北斉の王室に流るる淫乱の風は、始祖高歓に初まり高洋に至って最甚しきこと趙翼の劄記に詳かであり、其出処は北史の本記に拠つて居る」と述べているが、レビレットについては触れていない。
- (2) 宮崎市定『隋の煬帝』（中央公論社、一九八七年）一九頁。
- (3) 宮崎、前掲書、三二頁。
- (4) 北斉の後宮についてはおもに以下の研究がある。蔡幸娟「北斉北周与隋代内官制度研究」（『歴史学報』二四号、一九九八年）では北朝から隋に至る后妃の呼称の変遷について詳細に検討しているが、レビレットについては言及されていない。呂春盛「北斉政治史研究——北斉衰亡原因之考察」（国立台湾大学文学院、一九八七年）では「北斉的君権問題」として、北斉における皇位継承の問題を検討し、嫡子相続を目指したが、遊牧国家的実力主義の前に実現できなかったとする。また王怡辰「東魏北斉の統治集団」（文津出版、二〇〇六年、一五二〜一六九頁）では「統治集団的婚姻関係」として、高歓以下、北斉の皇室の婚姻関係について詳細に検討を加えている。李明仁『中国古代君主継承制之研究』（稻郷出版社、二〇一二年）も北斉の君主継承制について検討している。
- (5) 王怡辰、前掲書。
- (6) 蔡幸娟、前掲論文。
- (7) 『北史』卷一三、后妃上。
- (8) 『北斉書』卷一、神武紀上によると、高歓の祖父諡が罪を犯して懷朔鎮に配流され、父の高湖は白道の南に住んだとある。このことから懷朔鎮の行政区は白道の南にまで及んでいたと思われる。
- (9) 『北斉書』卷九、后妃伝は欠落しているため、『北史』を引用する。
- (10) 『北史』卷五四、婁昭伝によると婁氏一族は代郡平城の人で、家憧千

后妃のゆくえ（松下）

数、牛馬谷を以て量るほど資産を有する豪族で、のちに部族を率いて懷朔鎮に移住したと思われる。

- (11) 『北史』卷一四、蠕蠕公主伝。
- (12) 『北史』卷一四、馮翊太妃鄭氏伝では嚴祖の妹となっており、名も大車となつてはいるが、同書卷三五、鄭嚴祖伝では嚴祖の庶子仲礼の姉火車となつてはいる。
- (13) 王怡辰、前掲書は北魏孝文帝の婚姻政策により、北魏諸王が婚姻を結ぶ家柄が固定され、そのなかに北燕馮氏、隴西李氏の家があることを根拠としている。なお『北史』卷一四、本伝では「李延寔從妹」となつてはいるが、『魏書』卷一九下、城陽王徽伝では「徽後妻、莊帝舅女、侍中李暕、帝之姉婿」とあり、北魏孝文帝の舅が李延寔であるので、李氏は從妹ではなく、娘にあたることは、『北史』卷一四、校勘記が指摘する通りである。
- (14) 『魏書』卷八四、盧景裕伝。
- (15) 『北史』卷一四、后妃下では姉となつてはいる。
- (16) 趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』（天津古籍出版社、二〇〇八年）顔玉光墓誌、四七五頁。
- (17) 岡崎文夫『魏晋南北朝通史』（弘文堂書房、一九三二年、四一〇〜四一四頁）では隣和公主については趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』に蠕蠕公主墓誌（三八二〜三八三頁）があり、五五〇年（武定八年）四月七日、一三歳の若さで晋陽にて死亡している。
- (18) 武定三年（五四五）、任胄は爾朱文暢・房子遠・鄭仲礼らと高歓を殺害しようとして謀ったが、事前に発覚して胄とその子弟は誅殺された（『北斉書』卷一九、任胄伝）。また彭樂は五五一年（天保二年）、謀反を計画したが劉章に密告され誅殺された（『北史』卷五三）。
- (19) 蔡幸娟、前掲論文。
- (20) 『北斉書』卷八および『北史』卷八、後主本紀では右昭儀となつてはいる。
- (21) 『北史』卷三三、李孝貞伝には「諸房子女、多有才貌、又因昭信后（文宣皇后）、所以与帝室姻媾重疊」とある。
- (22) 沢田勲『匈奴』（東方書店、一九九六年）一〇二頁。
- (23) 王仲榮『北周六典』（中華書局、一九七九年）、蔡幸娟、前掲論文。

- (24) 鎌田重雄『秦漢政治制度の研究』（日本学術振興会、一九六二年）。
- (25) 『北史』卷九、周本紀では五〇歳で死去したとあるが、ここでは『周書』に従う。
- (26) 『北史』卷九、周本紀では七歳となっているが、ここでは『周書』に従う。
- (27) 『周書』卷七、宣帝紀「嗣位之初、方逞其欲。大行在殯、曾無戚容、即闕視先帝宮人、逼為淫乱」。
- (28) 会田大輔「北周天元皇帝考」（『東方学』一三二、二〇一六年）。
- (29) 則天武后は太宗の後妃であったが、太宗の崩御にともない他の后妃とともに出家させられて感業寺に入ったが、皇帝の崩御にともない后妃がみな出家させられるというのは実際には稀である。
- (30) 『隋書』卷三六、后妃伝。